

「農業＝食業と考えたらやるべきことが見えてきた」

『農業』から『食業』そして、『農村産業』創出へ ～オンリーワン産業の構築システムを目指して～

有限会社 伊豆沼農産(宮城県) 代表取締役 伊藤 秀雄

◆農業を食業にかえる

伊豆沼農産を創業した1988年当時、農業は「どんぶり勘定」と言われていた。農業の先生方から「これからの農業は計数化が大事、工業的にやりなさい」と指導され「農業を産業化しよう」という思いを込めて、企業を伊豆沼農産と名付けた。

農業を辞典で引くと、「大地に種を蒔いて植物を育て、また育てた植物を家畜に食わせて家畜を育てる」とあり、販売するという意味は含まれていない。しかし私は、これから生産、加工、販売を行ない、さらに付加価値をつけるためにレストランを運営して、農業を産業化したいと考えていた。

さらにそれを実践するためには、自分自身だけでなくスタッフにもそのことを十分に理解してもらわなくてはならなかった。そこで「農業を食業に変える」という言葉を旗印にすることで、自分たちのやるべきことが見えてきた。言葉に表すことでイメージが明確になりスタッフにも説明することができた。そして2004年「農業を食業に変える」を土台に置き、地域の産業としてわが社がどうすべきかを明らかにした。

◆5つの視点で経営に取り組む

これらの理念を軸に事業を展開するなかで、5つの視点を大事にしたいと考えている。1つは「農業者の視点」、そして2つ目は「お客様の視点」である。これは供給者主導の発想・行動であるプロダクトアウトと、消費者のニーズを聞いて対応するマーケットインとの関係づくりのことで、そのためには作り手もきちんと主張しながら、お客様の意見を聞く視点が必要となる。

それから3つ目は「女性の視点」。食やサービス業、つまり食農産業に人を誘導する力はやはり女性が大きい。そのために女性が行きたくなるような場を作ることが大切になる。

4つ目は「地域の視点」。地域ブランドとなるためには、地域の人たちに認知される、商品、会社でなければならない。そのためにも地域の視点をきちんと持ち地域と協調しながら事業を進めていきたい。

それから最後の5つ目は「運動の視点」。会員から年会費1,000円を頂いているが、そのうち20%を地域に還元している。会員の皆様には、わが社の商品を買って頂くだけでなく、わが社とのかかわりを通じ、さらに伊豆沼地域ともつながりを持ち、心のお付き合いをしていただけるようにと期待している。

◆農・商・工・学・官の連携

当社の農商工連携の取り組みは、「農」では、養豚と水稲・果樹、それから露地野菜づくりをしている。「工」では食肉製品製造としてハム・ソーセージ、その他にも惣菜製造・菓子製造・魚肉製品製造。地域にあるものをすべて食材として利活用していこうと取り組んでいる。「商」の部分では、地元の食材を使ったレストラン経営、農産物直売所や百貨店やインターネットでの販売。さらに2004年からは香港に輸出を始めた。

わが社には農畜産物の生産部門があり、加工部門があり、それを消費者につなぐ販売業、サービス業部門がある。さらに、登米市・宮城県をはじめとする行政である「官」とのつながり、さらに大学などの「学」とも連携して商品開発を行っている。

おかげさまでわが社は、平成20年度に第38回日本農

業賞の個別経営部門で大賞を受賞することができた。これまでの農業大賞受賞者は、規模が大きいとか、際立った技術を持っている方々だった。しかし、わが社は1次産業の部分も、2次産業の部分も、3次産業の部分も中途半端ではあるが、トータルとして地域の中でひとつの役割を果たしているということを評価頂いたものと思って感謝している。

◆農村の価値を丸ごと活用する

今後は、農業だけに限定するのではなく農村が持つ価値を丸ごと活用し、農村産業にしたいと考えている。

このような新しい農村産業の確立のためには、「あるもの探し」をやることから始めることが必要だろう。特別な宝物を探すより、地域にある普通のものの中に新たな価値を見出すことの方がずっと楽しい。例えば、普段その辺で歩いている人、いつも見ている風景やものなど、普通にあるものをいろんな角度から眺め、それらを組み合わせながら、新たな価値を見つけ出すこと。例えば普通に歩いているご老人に「あの人にわらを持たせたら、わら細工はすごい」とか、そういうことを一つひとつ知ると、自分が住んでいる地域が良いところ、すごい場所だと思えてくる。

地元の人自身が「地元にはこんなものもある、こんな人もいる」と地域の良さを再確認していくことが大切だ。そして、今度は自分が思うことを外からの人に話したくなる。そうすると「あそこはこういう人間がいっぱい住んでいるよ」「一度行ってみよう」と、好循環が始まってくる。最近伊豆沼では、地域を見直そうと、「新田あるもの探しの会」も立ちあがった。

地域の人みんなで地域資源を一緒に見つけ出す。その地域資源を生かしたものづくり、サービス開発、さらに環境保全に尽力し、雇用を生み出すことがこれからの農村産業づくりには欠かせない。そこから生まれてくる地域資源を商品として作り出し、全国情報発信すれば、「伊豆沼農産とはどんなところだ」と、伊豆沼地域に多くの人が集まってくるようになる。人が訪れると、作ったものが売れる、売ればさらに地域の雇用が増えるという好循環が繰り返されていく。

◆今後への期待 “オンリーワン” の地域

これからわが社は、ものづくり、サービス、人がほとんど訪れる地域づくりで協力してきたい。食や農、環境を柱にして、「循環」というキーワードを地域内で回していこうと考えている。地域の人たちを巻き込みながら、一緒に地域の中に新しい循環を浸透させることで、規模は小さいが、農村にある資源を使った、持続可能な事業が出来ると考えている。そのための仕組みづくりを進めていくためには、農・商・工・学・官の連携をさらに進めていくことが必要だろう。大学の先生やマスコミなどの第三者に広がれば多くの方々に関心をもってもらうことが出来る。

農村の価値を丸ごと生かし、新しい産業を地域全体で生み出していく。伊豆沼地域だけでなく、日本の各地でそのような動きが始まると非常に面白いだろう。その取り組みはそれぞれの地域資源を基軸にした産業づくりで、地域のオンリーワン産業になる。そんなオンリーワンの地域が日本全国に広がっていくことを期待している。



■有限会社 伊豆沼農産

1988年創業、89年法人化。従業員35名。生産組合による30ha規模の稲作経営、母豚30頭の一貫経営等を経て、1988年に「農業を食業に」をコンセプトに設立。ハム、ソーセージ等の農産加工・販売、農家直売所・レストラン経営などを幅広く展開している。
〒989-4601 宮城県登米市迫町新田字前沼149-7
TEL 0220-28-2986・FAX 0220-28-2987
<http://www.izunuma.co.jp/>